授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 1925 号

日独戦役における海軍病院船「八幡丸」の医療活動

(Medical Operation of The Hospital Ship “Yawata-maru” in The German-Japanese War (1914-1915))

柳川　錬平（やながわ　れんぺい）

博士（医学）

論文内容の要旨

日清戦役における「神戸丸」から第二次世界大戦における「氷川丸」まで、日本海軍は戦役の度に民間海運会社から徴傭した貨客船を艤装することで、総計１３隻におよぶ病院船を運用してきた。その中には「氷川丸」のように比較的細部まで解明されている海軍病院船が有る一方で、日独戦役における唯一の日本海軍病院船「八幡丸」の医療活動については、開戦１００周年が経過してもなお、未解明のまま病院船史の空白部分となっていた。

本研究では、海軍病院船「八幡丸」についての詳細な記録を含むことが知られながら元海軍省医務局長らの調査によっても所在不明とされていた部外秘公刊戦史である『大正三、四年戦役海軍衛生史』が、第二次世界大戦の後は米国議会図書館で所蔵されていたことを究明し、その複写を入手することで「八幡丸」が展開した医療活動の実情を解明した。さらに、これを既存の史料とも照合しながら同時代の病院船「博愛丸」および「弘済丸」や先代病院船「神戸丸」および「西京丸」と後継病院船「笠戸丸」と装備・人員・診療実績などを比較分析することで、「八幡丸」の医療史における位置づけも試みた。

その結果、青島周辺で活動した第二艦隊のみならず南太平洋のフィジーまで進出した南遣支隊にも十分な医療支援を提供しながら、その前例の無い航海で得られた知見を次期病院船「笠戸丸」に遺したことで、「八幡丸」は日本海軍病院船の歴史において近海仕様から遠洋仕様への一大転換点となっていたことが明らかとなった。